

## 英語学習に取り組むユーザーによる日英通訳サービスの受容の考察 -通訳を介した地方公民館講座の事例報告-

森元亜紀子

(フリーランス翻訳、通訳)

### Abstract

*This paper aims to investigate how users with a certain level of knowledge of English language, in addition to learning motivation, receive and utilize the presence of an interpreter and the corresponding translations provided by said interpreter, and hence to reveal the roles granted to the interpreter by the users. Six people in their 50s, 60s and 70s participated in this study, in which semi-structured interviews were conducted. The results revealed the users' different stances toward the interpreter: dependent and independent positions, each of which represented participants' dual identities as English learners and as group members. The interpreter became not only a linguistic assistant for learning materials, but also provided support for creating harmony among the users. This suggests that the users' individual or group characteristics can make their understanding of interpreters' roles varied and even unpredictable, thus raising interpreters' awareness of their unexpectedly wide-ranging possibilities as a communication facilitator.*

### 1. はじめに

通訳者が介在するコミュニケーションにおいて、通訳サービスの聞き手及び状況が重要な役割を持っていることは、主に会議通訳者らが強調してきた点である (Kuruz, 2001: 395)。そして 1989 年以降、聞き手に着目する研究として、通訳サービスの受け手、つまりユーザーが異なれば、通訳者に対する期待が変わり、その評価基準も変わるという点に着目する研究が数多く行われるようになり、主に会議通訳者の品質を判断する根拠を見出す目的で多くの実証研究がなされてきた (Kuruz, 2001: 396-403)。このようなユーザー研究では主に通訳者のパフォーマンスを評価する基準を提供することが目的で、ポエヒハッカー (2008) も「通訳の訳出行為の効果と質を測定するために研究者は利用者評価を用いた」(ポエヒハッカー, 2008: 189) とする。では実際に、ユーザーは通訳を介するコミュニケーションにおいて通訳をどのように受容しているのか。本稿は、ユーザーの受容に焦点をあてるが、ユーザーが通訳者のパフ

パフォーマンスに下す評価やその基準を探るものではなく、ユーザーによる通訳の受け止め方に注目する。特定の集団を構成するユーザー一人ひとりの通訳の受け止め方を具体的に描くことにより、ユーザーが通訳をどのように位置付け、活用しているか、そしてその活用の結果、ユーザーが通訳者にどのような役割を与えているのかについて明らかにすることを目的とする。浮かび上がる受容の現象から、通訳者の言語的サポートとは具体的にどのような役割か、ユーザー集団の中で果たしうる社会的役割とは何かを探り、通訳者が自らの意図に関わらず担うに至った役割を見出す。それによって、コミュニケーションの現場には通訳者自身が想定しなかった役割があるという認識を改めて促し、その場の当事者らがより満足する通訳パフォーマンスの提供につながることに少しでも寄与することを希求する。

現在は英語学習教材や民間の語学学校または公民館の語学講座の数からもわかる通り、学校教育を終えて社会に出た後も、生涯学習として英語を学ぶ日本語母語話者は多い。この状況で、通訳サービスのソース言語としての英語を、日本語母語話者であるユーザーが、一切理解しないとは限らない。ユーザーにある程度のソース言語の理解があり、かつ、さらなる習得を目指して取り組みを続けている場合、通訳をどのように活用しているのか。

通訳者が「どのように用いられているか」について、高橋・木村(2017/2018)がビジネス通訳の受容者調査を通して考察したものがある。ビジネス通訳の現場に焦点をあて、通訳者へのインタビュー調査に加え、通訳者を使った企業側(「英語ができるクライアント」)にインタビューを追加実施し、通訳者の視点と英語ができるクライアントの両者の視点から、一定の英語力を持ちつつも通訳を利用する状況や理由を分析し、通訳者に期待される役割を考察し、受容の研究に新たな視点を提供している。本稿では、地方公民館講座内の日・英通訳という一共同体の通訳現場に焦点をあて、既に英語の知識があるだけでなく、さらに習得を目指し自らの意思で学習を続けている日本語母語話者であるユーザーに着目し、その受容を調査した。英語の習得過程にある彼らが通訳をどのように受容し、活用しているかについて考察する。

## 2. 先行研究

### 2.1 「通訳者」のパワー

コミュニケーションの構成員としてみると、Alexieva (1997: 222-223) はコミュニケーションの「話し手と受取人」(Speaker and Addressee) を「主要な参与者」(primary participants) と表現し、通訳者を「二次的な参与者」(secondary participants) と捉えている。通訳者の二次的な存在性は、その役割が限定的に解釈され、「どのようなディスコースにおいても主導権を握ることを禁ずる」とされ、「導管」、「透明な翻訳機械」(ポエヒハッカー2008: 178) と比喻された歴史の流れに見出すことができる。

一方、通訳者はより能動的なコミュニケーション要素とも捉えられる。これは通訳者に対する従来の中立性の概念を問題視する形となった(Takimoto, 2006: 47, Ciorodia, 2016: 69)。その根拠は、それらの捉え方が、通訳者の活動を、訳すという行為のみに制限することになり、通訳業務の複雑性を考慮していないこと、特に、対話通訳者としてのコミュニティ通訳における、文化的な仲介がもつ重要性を無視しているという点にある(Ciorodia, 2016: 69)。Ciorosia

は、コミュニティ通訳者を“frequently active participants”と描写するに至っている(下線は筆者による)。

Wadensjö (1993: 367-8) も、対話通訳者の機能の二重性として、「コントロールとサービス」(control and service) の両方を行うと述べ、その立場を「ユニークで潜在的にパワフルな、中間の位置」(unique, and potentially powerful, middle position) と表現し、通訳者の持つ作用力を肯定しているといえる。Wadensjö (1995: 113) はまた、通訳者はある社会状況に参加しているのであり、話されたこと全てを理解する可能性を潜在的に有しており、その場の相互行為の「概要を把握」(overview) し、「調整」(coordinate) するユニークな可能性を有していると述べ、通訳者の持ちうるパワーを示唆している。

Anderson (1976: 212-213) は、発話者と聞き手の間の板挟みで弱い立場となりうる通訳者は、自分だけが両言語を理解するという事実によりエンパワーされる、と述べている。さらに、通訳者が話し手と聞き手の「忠実なこだま」(a faithful echo) となるときの役割を「無所属者の役割」(the role of nonpartisan) と描写しながらも、この役割を担うに至る通訳者の二つの異なる姿を、Simmel (1950) による二種類の「仲介者」の描写 (Simmel, 1950, Wolff, K. trans.: 149) を参考にして述べている。一つには、状況に対して公平無私で、対話者間のいずれの側からも離れ、相互作用における「受動的な要素」(a passive element) という通訳者の姿があり、また別に、「コミュニケーションの手段を独占することで享受するパワーを活用し、その内容を中庸性と合理性に沿うように操作する」、「公平だが隠れた操作者」として機能する姿が考えられるという。たとえ通訳者が情報を取捨選択し選択的に訳すことを選んでも、聞き手には確かめようがなく、後者は、通訳者がバイリンガルであることによって獲得しうる優位性を指摘しているといえる。

また Roy (1993: 348-352) は、通訳者の役割の比喻の変遷として、「導管」から、「コミュニケーション・ファシリテーター」(communication facilitator)、「バイリンガル、バイカルチュラルのスペシャリスト」(bilingual, bicultural specialists) までを挙げ、導管モデルの不適切性を主張しながら、通訳者の潜在的なパワーに言及している。通訳者のみが両語間の言語的な相違だけでなく言語戦略や会話管理を把握し、それらを「調節」(adjust)し「修復」(repair) できる唯一の存在であるとし、通訳者の能動性と影響力に改めて着目している。

Alexieva (1997: 221) も、異言語だけではなく異文化の橋渡しをする、と述べ、通訳者がバイリンガルだけでなく「バイカルチュラル」的側面でも優位性をもちうることを示唆する。1970年代末から80年代初期には、異言語の境だけでなく、異文化の境をも横切る存在であることに通訳者自ら敏感になるべきといわれるようになり (Roy, 1993: 351)、通訳者は「バイリンガルかつバイカルチュラル」な存在とされた。

それでは、ユーザー側もバイリンガルでバイカルチュラル的な要素を有しているとうなるか。Anderson (1976: 214) は、「クライアントのバイリンガル性によって、状況の構造が変化し、通訳者のパワーは消滅する」、と記している。これは、ユーザーの有する言語知識が、通訳者の優位性とさらにはその役割付けを変化させる可能性を示唆している。

## 2.2 「ユーザー」の影響力

では、ユーザーをどのように捉えるべきか。Ciodia (2016: 73) は、特に、コミュニティ通訳者の担う役割は、その場及び相互作用の特徴と、通訳者を使う側の期待から重大な影響を受けると述べ、ユーザーも含め、通訳者が活動する場の「性質」が与える大きな影響力を指摘している。Ciodia (2016: 73) はさらに、法廷など定まった形式でのやり取りではなく、コミュニケーションがより会話調でダイナミックに進展し得る医療相談などの通訳現場では、通訳者が自身の通訳教育の受講経験の有無に関わらず、その場の医者や患者のやり取りの内容に応じて、場にふさわしいと自身が考える基準を採用するという調査結果も示している。ユーザー側から通訳者の判断を左右するほどの影響力を有していると考えられる。

そもそも聞き手であるユーザーが「異文化間コミュニケーションプロセスの不可欠な要素」(Kurz, 2001: 398) であるならば、その場でアクティブに反応していると考えられる。つまり通訳者のパフォーマンスを評価するだけでなく、よりダイナミックに通訳を受け止め、活用し、通訳者の役割付けを行っているのではないか。

ここで改めて留意したい点は、先に述べた通り、ユーザー研究は通訳者の訳出の質の評価手段としてなされてきたという背景である。新崎 (2017: 168) による、「聞き手」の視点に立った調査の詳細な先行研究では、「聞き手の視点に立った通訳の評価に関する研究は1990年前後から盛んになった」と書き出され、ユーザーの受容研究の当初の主な目的が、通訳に対する評価の充実であったことがうかがえる。ポエヒハッカー (2008: 187) も、「クライアントの期待に関する調査研究は、コミュニティ関連分野でも実施されてきているが、「良い通訳者」と望ましい通訳者の行動に関する基準を強調するものだった」としている。

しかし様々な「性質」のユーザーがいることを考慮すると、ユーザーによる通訳評価だけでなく、通訳の受け止め方や活用の様子まで詳細に読み解くと、ユーザーが通訳者に思いもよらない意味を付与していたり、コミュニケーションを円滑に進めるための補助を求めている可能性など、通訳者の意図によらず担うに至る役割について示唆を得ることができると考える。

また、注目するユーザーの性質として、ソース言語の理解がある場合については、Kurz (2001: 403)も紹介する通り、同時通訳者を「助け」(an aid)、「字幕」(subtitling) と捉えるという報告がある (Vuorikoski, 1995: 5)。しかし、ソース言語の知識に加えて、ユーザー自身がその言語習得のため自らの意思で学習している場合、通訳をどのように受け止めているかについてはまだ明確にされてはいない。日本国内の外国人観光客数は増加の一途であり、大都市でなく地方でも、外国人観光客の姿を目にするのは多くなった。さらに今後新たな外国人労働者の流入が実現すると、観光地のみならず職場など日常生活でも外国人との接触が増えることが予測され、「おもてなし」の意識からや、円滑な意思疎通のため自らの英語力を高めようと学習する人も増えるのではないか。このような人々が何らかのコミュニケーション現場で通訳ユーザーとなった時、通訳を言語転換に役立てるだけなのか、他に活用の仕方があるのかを考察することは、通訳者の役割の新たな一面を見出す助けとなると考える。よって、本稿にて検討すべき課題として、以下の2つの問いを立てた。

(1) ソース言語を部分的に理解し、かつその言語知識の維持・向上の意欲を持ち、自ら学習

に取り組むユーザーが、通訳をどのように位置づけ、具体的にどのように活用しているか。

(2) (1)で見出されたユーザーの通訳の活用の在り方から、通訳者が担うに至った役割は何か。

### 3. 調査の対象、調査及び分析方法

#### 3.1 調査対象として選択した事例

本稿では、ある県の一地方の公民館講座の通訳現場をとりあげる。事例とする講座は、2017年4月(試行はその前年4月開始)から月2回開催されている、英語による健康講座「フレンチリラクゼーション」である。これは、「瞑想、気功、整体を通して健全な心身の維持を目指す」という副題で、1回2時間で前半にゼミ形式で講師による説明があり、後半に気功や瞑想、整体を実践する。講師の母語はフランス語だが、普段使用している英語で指導を行う。

本事例は、地域在住の外国人講師と地元住民の交流の一環ともなっており、講師との会話によるふれあいを楽しみにしている受講者もいる。水野(2011: 227)は、コミュニティ通訳として、司法、医療、行政という主な分野のほかに、「地域の国際交流活動も含めた様々な活動も含まれる」としており、本事例の通訳にその側面もあるが、講座の講義的要素を考慮すると、受講者6名と少数ではあるが聞き手は複数であり、講演会等の逐次通訳の形式に類似している。

本稿で、通訳サービスの「ユーザー」と捉える受講者6名は日本語を母語とし、外国語である英語をある程度理解し、かつ、さらなる習得に各自努めており、従って受講動機も、内容に対する関心とともに、「英語に触れる」ことも目的としている。これらのユーザーの英語力の客観的指標は入手できなかったが、学校教育を終えてからも生涯学習として自らの意思で英語学習を積み重ねてきていること、さらに既得の語学力を維持または向上させる意欲もあり、引き続き何らかの取り組みをしているという点で、本稿におけるユーザーを、「ある程度の英語の知識があり、かつさらなる習得を目指し学習している者」と捉える。

#### 3.2 調査方法

半構造化面接法による一対一の面接調査で、1回50分から60分間実施した。面接前に「面接承諾書」で調査概要と趣旨、倫理的配慮を説明し署名を得た(質問は巻末に記載)。面接調査を選択した理由は、対象となる受講者が少数でアクセスしやすかったこと、成人学習者の文化として、記述よりも口頭で質問し回答を得るほうが、より自然で内容豊富な事柄を開示してくれるものと判断したからである。Ricoy(2017: 43)も、口頭の文化を有する集団からの情報抽出には「Face-to-Face interview」に「質問紙に劣る欠陥を補うに足る利点」がある、と述べている。ユーザー一人ひとりの話を細かく聞き取り、示唆に富むコメントをできる限り回収するには、記述式よりも、面接調査の方がより適切であろうと判断した。

なお、面接を実施した筆者自身が、講座の試行段階から通訳者として同席していた。講座開始以前は、筆者は受講者との面識はなかった。

|             |  |
|-------------|--|
| 性別・年代       | 高校・大学卒業後の英語学習経験と、現在の英語学習への思いと取り組み  |
| (i1) 女性・70代 | 高校英語教師を退職後、在職中交流のあった外国人指導助手と互いの国を行き来などしてきた。スムーズでなくても直接話して何とか伝わる英会話が楽しい。現在は英語のニュースなどを視聴し英語との接触を確保。      |
| (i2) 女性・70代 | 短大卒業後、海外旅行を繰り返し現地で英語やフランス語を使用。2019年にはフランス、アイルランドに長期滞在を計画中だが、英語力全体の衰えを感じているので、現在は定期的にあるテレビの語学講座を活用し学習中。 |
| (i3) 女性・70代 | 生涯学習歴 20 年。民間の語学学校、公民館の英語講座を活用して学習。また知人 3 名と定期的に勉強会を開催。日本人講師の英会話クラスも受講中で、毎回楽しい。                        |
| (i4) 女性・60代 | 生涯学習歴 15 年。複数の公民館の英語講座を活用して学習。日本人講師の英会話クラスを受講中で、毎回ゲームなどして楽しく勉強できている。ここで習った表現を本講座の講師との会話で実践することが楽しい。    |
| (i5) 女性・50代 | 大学卒業後も民間の教室、ラジオの語学講座を利用し学習。今後仕事も兼ねてアジア諸国に行くことが増えるので、特にスピーキング力を向上させたいと思っており、新たに民間の英語教室の受講を増やしたばかり。      |
| (i6) 男性・60代 | 大学卒業後、仕事上、海外とのやり取りで英語を使う。現在は、瞑想の時に講師が話す詩的な英文や、哲学に関わる講話をいかに日本語に置き換えるかに関心があり、講座中の通訳を参考にしている。             |

表1 面接を実施した受講者 記号(i1)から(i6)は本文中にコメントを引用する際に使用

### 3.3 分析方法

Wadensjö (1995: 112) は、通訳者が介する場所を「社会的な状況」(social situation) としている。本稿において、この事例を一つの社会的状況とし、これを捉える概念的なカテゴリーを考えた。ロフランド, J. & ロフランド, L. (1997) は、いくつもの「社会状況」“social settings” を、社会全体の文脈にどう位置づけるか見極めることを、「広範囲のキャンパスに関係づける」と述べ、特定の事例がどのような社会カテゴリーに分類されるかを判断する指標として、社会規模を表す「単位」、及び内容を表す「局面」という用語を用いている (ロフランド, J. & ロフランド, L., 1997: 139)。そして、「単位や局面は、コーディング活動に対する心の準備」とし、分析単位は柔軟であるべきと訴えたうえで、「データのコーディングに際して、いかなる種類の事柄に目を向けなければならないかの一般的な方向付け」(ロフランド, J. & ロフランド, L., 1997: 167)、としている。この分析単位について、関口 (2013: 189-190) は、「現実世界を捉える概念的なカテゴリー」とし、分析の焦点を絞り、「研究対象となる事象を他の事象から区別立てるなかで生み出される分析の単位」と説明する。本事例を捉えるために、ロフランドらの分析単位のうち、大きいものから順に「ライフスタイル・下位文化」、「集団」、「関係」、「役割」を適用し、本事例が有する以下 a)、b)、c)の側面からアプローチした。これらを指標として面接調査のスキプトの

コーディングを行い、分析、解釈を行った。

- a) 「健康志向」「英語学習志向」という「ライフスタイル・下位文化」であるという側面
- b) 「集団」が形成されているという側面
- c) 集団の中で「関係」が構築され、その中で通訳者に流動的な意味が付与され、「役割」が付与されているという側面

#### 4. 分析結果

分析を行った結果、英語習得に努める受講者らが、通訳サービスのユーザーとして異なる二つの立場、即ち依存する立場と独立する立場を持つに至り、通訳者に異なる役割を与えているということが見出された。以下に分類とその解釈を記す。

##### 4.1 「健康志向」と「英語学習志向」という下位文化

講座「フレンチリラクゼーション」が形成する空間は、特定の「ライフスタイル・下位文化」(ロフランド, J & ロフランド, L, 1997: 154) を共有する人々の集まりである。一つは、「リラクゼーション」という講座名が示す通り、意識的にリラックスし、心身の健康維持に関心を示す「健康志向」の人々の集まりである。また、表1の「英語学習への思いと取り組み」が示す通り、英語力向上に努める者の集まりであるという点で、「英語学習志向」の下位文化も形成されているといえる。対象とした公民館には、本事例以外にも、健康維持を目的とした講座が複数(全講座80件のうち、「健康・スポーツ」という分類に16件)あるが、あえて、外国人講師による、英語を介した本講座を選択するという点で、受講者の英語に対する前向きな姿勢がうかがえる。受講者の受講動機にも、「外国人が講師だから」「生の英語に触れるため」という、講座の内容以外に語学面の関心を示すコメントが複数あった。「健康志向」、「英語学習志向」の2つの下位文化の枠組みから、ユーザーの通訳の受け止め方を分析した。

##### 4.1.1 健康志向

高橋・木村(2017: 6-7)は通訳者の使い分けの理由として、時間・労力の「負担軽減のため」という分類を示している。通訳者が訳してくれると「楽」だと考えるユーザーは一般的に存在すると考えられ、本事例の面接調査でも同様の感覚を示すコメントが得られた。

「便利、便利。だから私、喋れる人がいたら、絶対言わない。その人を介してしか。乗り越えない、その人を。なんか、自分が言わなきゃいけない、という危機的な状況に陥ると(英語を)言うけれども、その必要なかったら、お任せしたら楽じゃないですかー」(i2)

一方、本事例を健康志向の人々がリラックスを求める場という側面から捉えると、この場で通訳に求める「楽」の提供は限定的であることがわかる。ユーザーらは、講座内で講師に質問をする際は日本語で話し通訳者が英訳するが、講座前後での雑談は英語を使うという傾向がある。この言語使い分けについて、以下のコメントを得た。質問の際の母語使用については、

「余裕があればね、何とか英語でしゃべろうと思うんですけど、余裕がないときはやっぱり日本語ですよ。時間とかじゃなくて、気持ちの余裕があれば英語でしゃべります...何とか英語でしゃべっていったら、またそこ頭使って疲れるじゃないですか、だからリラックスしたいときは、自分がね、日本語。」(i4) (...の省略は筆者)

講座前後の講師との雑談を英語で行うことについては、

「だからもう、お勉強じゃないじゃないですか。講師と私なので。レッスンの間は授業があるので講師の言ったりしてることを吸収したいと思いますけど、もう終わると、リラックス状態なので、だからやっぱり英語も出てくると思うんですよ。お勉強の縛りがないので。あとはコミュニケーションだけなので。緊張してるときは英語は出てこない。」(i4)

講座内での母語使用は、英訳できないからという完全な妥協ではなく、自分を疲れさせないための、積極的な母語選択の結果、通訳者に依存している。一方、雑談では「リラックス」して英語でコミュニケーションをはかる。この場でユーザーが通訳者に求めている「楽」とは、全ての英訳ではなく、「疲れる」英語使用だけを省くものであり、限定的と言える。ユーザーが楽しめる「リラックス」状態での英語は自ら積極的に使用し、ユーザーの求める「リラックス」を阻害しかねない英語だけを通訳者に依存し任せ、この場での英語使用を楽しみ体験のまま維持している。

これは、ユーザーの英語を区別して捉える意識を示していると考えられる。「頭を使って疲れる英語」と、「リラックス状態」なら自然と口から「出てくる英語」、という区別である。(i4)には、同じ公民館で実施された英語講座の受講経験がある。この講座は、地元の大学の調査対象として、学習効果を測定する目的で行われたもので、語学力向上のため系統的にプログラムされた講座であった。この受講体験について(i4)は、「挨拶ぐらいできればいいと思って行ったら、カリキュラムがバシャーっと組まれているやつ。もうわけがわからなくなって、ディクテーションいうのもわからない人が、勉強しなきゃいけないんだから、大変なことだったんです。...熱が出たんですよ。(笑い)熱が。でもしゃべれんの。」と語る。一方、「英会話、めっちゃ面白いですよ。自分の人生、英会話習い始めてね、めちゃくちゃ面白いなと思って。」とも語っている。(i4)にとっては、緊張や不安を感じる英語と、人生を楽しくする、リラックス状態での英語という区別があり、この現場では緊張・不安感を伴う英語は通訳者に託し、自らの英語使用はリラックスできる楽しい体験として維持する。通訳者には、ユーザーの英語体験から緊張と不安の部分のみを取り除く役割を与えているといえる。

生涯学習として英語を学ぶ人達を対象とした研究で、糸井(2005: 42)は、特にシニア層には、満足のいく言語学習をするには情意的な負担をなくすことの重要性を認めている。「過去の学習の失敗体験から来る不安を除くことと、自信をつける体験をさせること」に言及している。従って、(i4)の通訳への依存の仕方のように、ユーザーのこの場での英語使用体験は確保し

つつ、不安を伴う部分のみ通訳者が引き受けることで、語学学習を兼ねた受講体験全体における不安要素は軽減され、動機付け維持にもつながっているのではないか、とも考える。

この点は、スピーキングに限らず、リスニングにも言えることであろう。(i3)は、以前受講した他の英語講座での緊張や義務感のある学習経験と比較し、本講座では講師の英語が聞き取れない時は通訳に頼るので、単に「生の英語」を耳にするだけで学習上満足できると語った。

「ほかの所にも行ったんですよ、グループで、一緒に外人さんとこでいろんな英語習ったりとか、でも、その時は自分はすごく緊張して、「しなくちゃしなくちゃって」思っちゃってるから、リラックス全然できてないような状態で勉強してたから。もうこの年になったら、ゆっくりのんびりやろうと思って。講師の英語も、生の英語を聞くのが目的だから、聞けるんだったらそれはそれでいい。わからなくてもわかって。でも、通訳してくれるから、意味はわかる、と。私はそれはそれでいいと思ってるの。英語教室に来てるわけじゃないんだから。」(i3)

聞いて理解できない部分があるとそれに引きずられ、不安や挫折感で学習意欲も減退しうるが、「聞き取れない英語」は通訳に頼り理解し、ここに通訳者の不安解消という役割が見える。

#### 4.1.2 英語学習志向

英語学習志向の下位文化という側面から見ると、ユーザーは通訳者の言語的サポートを段階的に活用し学習面で依存、最終的に通訳者に「教材」としての役割を付与していた。具体的には、a)「内容理解の補完」、b)「理解の検証」、c)「翻訳学習教材」として活用する姿である。

##### a) 内容理解の補完

受講者全員が、講座中は常に英語を聞こうしている、と語った。「耳は開いている」(i4)「基本、英語を聞いている。」(i5)「両方聞いてます。」(i6)など。その上で、自分の力で理解できる部分と、それを超える部分を意識し、通訳者の訳出に依存し始める境界を認識している。

「基本、英語を聞いているかもしれない。で、わかんないことかは通訳を聞いてなるほど一つて。...複雑な説明が入る時は、通訳いた方がなるほど一つて、簡単な文は(大丈夫)。すごい説明(横隔膜や体内臓器の話)が入ったりすると、うん？ってわかんなかったりする。」(i5)  
「難しいことはわからないので、軽い感じしか。難しいことがでると通訳がないと無理じゃないかな。」(i4)

「腎臓とかね、肝臓じゃいうとこね。Kidney かな？知りませんからね、単語を。Kidney、腎臓って言われた時に、ああそういうことかと認識するでしょ？専門用語ですかね、それ、欲しいですね、情報としてね。」(i6)

「それで私、tension ってよく聞くけど、何を言ってるのか全然わからなかったの。で、ずーっと聞いてるうちに、話の中でね、それと、通訳さんの訳の中で、tension って緊張のことかな？

って思っ。で、家に帰ってね、電子辞書で「緊張」って入れたら、tension っ。てあるじゃない。  
「あーそうなんだ、やっぱりっ」(i3) (...省略と括弧は筆者の加筆)

これは、自分のリスニング力では対応できなくなる境を認識すると、通訳を頼りに情報を補充し、理解を補う作業を行っており、通訳者を「理解の補完」役としている。常に「耳を開いて」英語を聞きとる姿勢を維持しているが、専門的な説明が始まると、通訳依存傾向に傾く。訳出を活用して自分の理解を補うことで、講座の内容理解を完成させていく。上記(i3)の場合、未知の単語に出会うと、その文脈から意味を推測し、かつ通訳者の訳出の中でその意味を探し、理解につなげている。最終的には辞書で確認し、確実なものとしている。

理解の補完をしながら、訳された母語で認知を確実にしていることを示すコメントも得た。(i3)は、「きちっとした理解ができる、だから講座にもしっかりついていくことができる。」と述べているが、これは通訳者の日本語訳を活用し、母語によってより確実な認知を可能にしているといえる。(i4)も、「(講師が)いろいろと教えて下さるので、それに一生懸命集中したいときは、そちらの方にいっちゃうかな。日本語で吸収しようと思いますね。」と語っている。「認知機能の確保」を目的として、自ら英語ができるのに通訳を利用するクライアントの姿は、高橋・木村(2018:101)の研究で報告されている。「通訳者がいることで、クライアントは認知機能がより発揮できるといえる」と分析しており、本事例のユーザーの場合も、通訳者への依存の結果、「認知機能の確保」が可能となっているといえる。

一方、自分の英語リスニング力で理解できる部分とそれを越えた部分との境界の認識がなく、英語を聞いて全体を理解していると思込んでいたユーザーが、通訳を聞くことによって、実は自分の理解に隙間あったことに気付く例もあった。これは、通訳を聞いて、自分の理解の軌道修正を行っている例といえる。

「単語を聞き逃したり、わかんなかったり。全体を、言われることはわかるんだけどね。細かいことをね。あ、こんなことを聞き逃したなっていうのがある...意味は伝わって...あ、この言葉を、そういう言葉を聞き逃したってわかったのが、よかったと思う。率直に言っ。」(i2)

通訳者の訳出を聞いて自分の認知の不完全な部分を認識し、隙間を埋めることで、認知形成の軌道修正を行っていく様子が見えてくる。

## b) 理解の検証

ユーザーは常に講師の発話に耳を開いており、聞き終わるたびに、逐次通訳を聞く。その訳出を「解答」とし、自らの聞き取り結果と答え合わせをしており、通訳を模範にし「理解の検証」に活用する姿も見出せた。「自分の聞き取った内容と、訳出を比較してる」(i5)、「自分の理解が、ああ、合ってたんだっていう確認になる」(i3)などのコメントがあった。

また、受講中のユーザーが、通訳を聞いた後で、「やっぱり」とつぶやくのを聞くことも多い。これは、自分の耳で聞き取った英語の内容を、その場で通訳と照らし合わせて答え合わせを

していることを示している。

高橋・木村（2017: 6）は、英語ができる人があえて通訳を使う理由の一つとして、「自分でも理解しているけど、その理解が正しいかどうかという自信のなさや不安な気持ちから、通訳の訳出を聞いて確認する」という心理的理由を挙げているが、この「確認」のために本事例のユーザーも「理解の検証」役として通訳者を役割付けているといえる。

英語を聞いてすぐ、逐次通訳の日本語を聞いて確認するという作業を繰り返すことは、英・日の異なる言語のインプットを短いスパンで切り替えていく体験を積み重ねることとなり、外国語学習上の効果があったというコメントがあった。

「映画もね、英語と訳と、両方みてますもん、私。そういう見方ができるようになったんですよ。なんか、少しわかるようになってきましたからね。やっぱり、ボディーブローみたいに効くんじやないですかね、ああいう体験がね。」(i6)

これは、映画の日本語字幕ばかりではなく、字幕に目を通しながら同時に英語の音声にも意識を向けることができるようになり、英語と母語の併用の効果を実感していることを示す。英語学習法の一つとして、母語を介入せずに英語だけを使うことを重視するものがあるが、通訳者がいる空間はこれとは反対で、英語も母語も同程度のインプットになる。しかも、理解の伴わない英語を聞き流すのではなく、訳出を頼りに内容理解を確実にした英語インプットとなる。この繰り返しを通して、(i6)には「少しわかるようになった」という認識があり、英語習得プロセスが進展した実感があると指摘している。母語を排除しない外国語学習と、通訳現場で原発話と通訳の両方を聞く体験の学習効果との関係については、今後、検討したい。

#### c) 翻訳学習教材:

さらに、英語を聞いて意味は理解できるが、それを日本語ではどのようにわかりやすく表現したらいいのか、という具体例を訳出に見出し、訳し方の「教材」という役割も与えていた。

「こういう言い方するんや一って。ものすごい勉強になりましたもん。」(i4)

「こんなふう日本語に言い回し、言い換えたらいいんだわーて思うときもある。訳し方。こういう風に訳すとうまくいくんだなっていうところがある。なるほど、こういう言い回しだって」(i5)

「両方(英語と日本語)聞きます。どう訳されるかな、と思って。」(i6)（括弧は筆者による。）

「言われたことを、こういうふう日本語らしく表現できるんだって、勉強になったわ。」(i2)

これは、講師の発話内容の理解を通訳に依存しているのではなく、内容を理解した上で、それをどのように日本語に訳すのか、という翻訳技術への関心である。ユーザーらは、ソース言語と、それに対する逐次訳の両方を受け取り、照らし合わせ新たな発見をしている。英文を頭から訳し下ろす、無生物主語の処理の仕方、など、二言語間の発想の違いを考慮した訳を見出し、その「言い換え方」が学習上参考になる、と捉えている。この点で通訳者は日英の発想

の違いに注意を喚起し、「翻訳技術」の学びを提供するという「教材」的役割を担っているといえる。(i5)は、「英語をいかに日本語らしい表現に置き換えるかという点に気が付くことが楽しくなった」とも語っており、通訳を通して外国語学習に新たな関心を持つことにつながっている点で、通訳者はユーザーの学習意欲を刺激するに至っているとも言える。

#### 4.2 通訳からの独立

以上のような、言語的に通訳に依存するユーザーの姿とは反対に、通訳から独立して自ら英語に臨む姿勢も見出された。

##### 4.2.1 「ワンクッション」

通訳が間に入ることで、コミュニケーションの直接性が失われるという感覚も表現された。英語と日本語の使い分けのタイミングについての質問に対して、(i6)は、講師への質問は自ら英語で聞きたい、と述べ、

「やっぱりね、ここになると、ワンクッションはいると...、ダイレクトに質問した方が、聞きたいポイントを、触れると思ってるんですよ。通訳さんがいるとワンクッション入ってしまうので。」(i6)

これは、通訳者の存在をコミュニケーションの相手である講師とユーザー間に介在する「ワンクッション」と捉え、むしろ独立して自力で英語を伝える姿勢といえる。(i6)は「やっぱり対峙したい、取引したい、と。直接の。だと思ふ。やっぱり英語で言いたいですね。」と、直接のやり取りを重視する考えを示した。異文化において、コミュニケーションの相手が使う言語で話すことで、会話の実感をもてるという感覚を示すコメントがあった。例えば(i2)は、自分で英語を使って用を済ませる旅と、通訳ガイドに言葉のやりとりを全て任せる旅の経験を比較して、(i2)は、

「(ガイドに頼ると)どっちかという、ただのお客さんっていう感じで旅行してるけれど、昔(自分で英語を使っていた旅)はもっとう、土地になじんだ感じ、むこうも一生懸命教えてくれるし、こちらも一生懸命で、だから、充実感？」(i2) (括弧は筆者の加筆)

これは、先にみた「英語を使って疲れる」という英語観とは異なり、英語を使うことで充実感を得る、積極的に英語に関与する姿勢といえる。通訳を介さず、独立した参与者として自力で話すことで主導権の一端を担う感覚であり、コミュニケーションの充実感や達成感をもたらす。(i1)は、高校の英語教師の経験から、学習者が自分で英語を話す、「自分がやる」ことの持つ意味を、学習の「楽しさ」とつなげている。「オーラルコミュニケーションというのが楽しいんですよ。そんなんしてると、自分がやってる気になる」(i1)、と語り、充実感ゆえの楽しさを指摘している。

英語を使って話すという行為を、今回の面接調査でユーザーたちは「しゃべる」という言葉で表現していた。「しゃべる」ことができる、ということが英語習得中のユーザーらにとって特別の意味を有していることを示唆するものが複数あった。

「ラジオの〇〇と△△(いずれも語学番組名)はなるべく聞くようにはしてて、でもやっぱり、自分からしゃべらないといけないなって思っ。この間(外国)行って、出てこなくて、英語が。ま  
ずいわって思っ。もうちょっと英語を...しゃべる練習をしたって思っ。」(i5)

「どんどんしゃべれなくなってるのがもどかしい気がする。とっさにでてこなくなった。」(i2)

「一番身に着いたのは、実際に旅行に行って、しゃべったことかな。」(i2) (括弧は筆者)

これらのコメントから、「しゃべる」ことは、英語力の目安であり、証であり、かつ、英語上達法として認識されていると考えることができる。英語を使って「しゃべる」、つまりスピーキングは、英語コミュニケーションでの達成感や楽しさを得ることになり、さらに、英語力の証であり、上達の手段でもある。ユーザーらは、その英語力と直結したものと捉えていることが示唆される。糸井(2007: 171-180)は、生涯学習としての英語講座を受講する生徒たちのニーズ分析を実施し、最も伸ばしたいスキルとしてスピーキング力を挙げている。スピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの力はそれぞれ相互に大きく影響するが、中でもスピーキングが学習者にとって特別な意味をもっていることは、コミュニケーションの実感や楽しさと何らかの関係があると考えられる。従って本事例のユーザーのように、ソース言語を「しゃべる」ことに前向きなユーザーに対しては、その姿勢を優先し訳出を控える事も必要となろう。(i1)は、通訳者が「タイミングよく存在感を消すことがあり、出過ぎず、役割を果たした」と語ったが、通訳者がユーザーの様子に応じて適宜訳出を控えることも彼らの満足確保となることを示している。

#### 4.2.2 「不自然な日本語訳」への対応

通訳者による不自然な和訳への対応の仕方にも、独立するユーザーの姿が見られた。講座で瞑想をする間、講師は毎回同じ言葉で指示を出す。「目を閉じてください。意識を頭に集中してください。湖を想像してください。」これに続く一連の指示の中で **There is nothing special to do.** というセリフがある。文脈と英文の短さを考慮すると、「そのまま構いません」という意識が考えられるが、通訳者はこれを、「特別なことは何もありません。」とそのまま訳している。この和訳について、当初は不自然な日本語と受け止められていたが、その後は、各ユーザーが自ら解釈し、消化していったことも明らかになった。

「普段習っている英会話の中で **Nothing special...**「今日はいつもと変わらない」ってそういう時に使うんであって、話の流れ中でつながってないって思うよね。まあ、「何も考えなくていい」ってことかなって思っ。最初は「変な日本語」って思ったけど、今はもう全然そうないの。結局それは、何も考えないんでいいんですってことでしょ？」(i3)

「(不自然だと)ちょっと思っ。ほかに何も言い方はないかなーと。」(i1)

「でも、わかりますよ、気負わずにそのままにっ、解釈してる。」(i5)

通訳を各ユーザーが自分なりに解釈を生み出し消化していることがわかる。さらに、その訳出を、講師の発話とイコールのものと位置付けることなく、ある一つの解釈例として受け止めるユ

ーザーもいた。

「不自然に思ったことが 1、2 度あったかもしれないけど、それは常に自分の中で消化できるじゃないですか。彼女(通訳者)はこういったけれども、先生はこういった、でも彼女はこういう風に言いたいんだな、私はこういう風にとらえておこうと。それぞれを自分の中で情報として取り入れる？ 鵜呑みにはしない」(i2) (括弧は筆者の加筆)

このように、訳出と自らの解釈と合わせてメッセージを捉えていく。それはソース言語の知識があつて可能となる。新崎の研究(新崎, 2017: 168)でも引用されているが、Ng (1992: 37) は、通訳の聞き手が、メッセージの不明瞭さをスピーカーの責任にはせず、通訳者への非難へとつなげている事例を報告している。これについて新崎(2017: 169)は「利用者が原発言と通訳を比べられないことと関係がある」と説明している。ソース言語の知識のないユーザーから見ると、「不自然な訳」は通訳者の不完全なパフォーマンスとして映りえるが、本事例の場合、ユーザーらは原発言が意味することをある程度理解しており、それをそのまま置き換えた不自然な直訳を聞いても、通訳を責めるには至らず、自ら解釈を考えることが可能となっている。

これは、原発言の理解があるゆえの、「独立したユーザー」の姿であり、通訳者の訳出を絶対視せず、単なる解釈例として捉えている。この状況は「導管」と例えられた通訳者のイメージとは異なるもので、スピーカーとユーザーをつなぐ「管」として通訳者が介在するという図では説明できない。むしろスピーカーと通訳者のそれぞれと、ユーザーが個別に繋がっている図になる。通訳者を参照用の情報を提供する者と受け止める。Anderson (1976: 214)の言う、「力を失う通訳」に対応する、力を持ち独立するユーザーの姿といえる。

#### 4.3 「集団」のなかでの他者との「関係」において

次に、ユーザーが一つの「集団」を形成しているという側面から検討する。この集団内でのユーザー間の関係から通訳に依存する姿が見出された。それは周囲への「配慮」のための依存、個人としての相手との対峙を避けるための依存、そして集団内の心理的駆け引きを防ぐための依存である。この依存により通訳者はユーザー集団内での調和を維持する調整役を担っていた。さらに、「自己顕示」として通訳から独立する姿も見られた。

##### 4.3.1 集団の一員としての依存

###### a) 周囲への「配慮」

通訳を介さず、自分で英語を使って講師に質問すると他の受講者を待たせることになるならやめる、という理由で、通訳に依存するユーザーの姿が見出された。

「英語でね、講座の時に、簡単な文話そうかなって思って、でも文章作ってしまってるから、もうはるかかなたにいつてるときってあるでしょ。話題が。そういうときはもう黙っとく。間に合わない。でもそれは英語でしようとするからで、そしたらもう日本語になっちゃうでしょ？で、通

訳してくださるでしょ？でもね、それが英語教室じゃないんだから、ね？全部、英語を作って言うっていうのは、それはできないよね。ほかの人もいるから、やっぱり。」(i3)

これは、自分の英語使用のために受講仲間の時間を奪ってはいけないという配慮である。通訳への依存に「時間の節約」という実質的な効果を認めるコメントとして「もし直接、自分の能力の範囲内で言おうと思ったら時間ももっとかかると思うんですよ、でも言ったら瞬間的に通訳してくださるから、時間の節約」(i4)があったが、上記(i3)の通訳への依存は、他の人を待たせてはいけない、との配慮から母語を使用するゆえの依存である。この時通訳者は英訳することで、ユーザーが集団内で感じる気まずさを取り除き、調和維持の役割を担うことになる。

また、「待たせてはいけない」という(i3)の思いには、コミュニケーションにふさわしい自然な「速度」があるという捉え方が背景にある。「すぐでてこない。疑問文とかあったりしたら、ゆっくりやってしたらできるけどー、そんなしたら会話にならないでしょ？」と語っており、英会話の「速度」基準があり、それを下回る英語使用は周囲を待たせるものとして控え、通訳に依存する判断をしている。

#### b) 対峙回避のための依存

コミュニケーションの相手であり異文化の他者である講師と、直接対峙することを避けるために、講師の使う「英語」ではなく、「日本語」を選択し、通訳者を取って介在させるという行為も見られた。(i6)は「通訳を介するというのは、日本人特有の遠慮があるかもしれないですね。遠慮的な思考。日本人にはそういうところがあるでしょ。」と語ったが、これは通訳者を介在させることで、集団の一員という存在を離れ個人となって直接相手に対峙しないというユーザーの選択を示している。講座中日本語で質問する際、ユーザー達は問いかける相手である講師を直接見ず、通訳者の方に目を向け語りかけることが目立った。通訳を介した会話に不慣れという理由もあろうが、講師との間に言語的に通訳者を介在させ、明確になった通訳者の可視性に依存して相手との対峙をかわす役割を与えているとも解釈できる。本事例のユーザーのように渡航経験も多く、進んで英語を媒体とする講座を選ぶ者でも、異文化の他者に対して心理的な壁を残していることは、通訳者も意識しておく必要がある。

#### c) 安心感を求め、競争意識けん制のための依存

通訳者がいることによる言語的安心感は複数のユーザーが言及している。「通訳さんがいらっしゃるから、もう安心してます。」(i6)、「わからないことあっても、通訳さんおられるから安心。」(i1)。しかしこのような言語的な安心感ではなく、通訳に依存し英語でのやり取りを任せることで、集団の中での安心感を享受できるというコメントもあった。集団の中での自らの存在に関る、社会的意味での安心感である。

「通訳いて下さって、安心。グループだと、私、気を遣うんですよ。いらぬ競争心とかそういうもの、妬みとか。英語喋りたい人はしゃべってください、いいじゃないって思うし」(i2)

これは、英語を楽しく話したいが話せないこともある一種のジレンマを感じている可能性のあるユーザー集団において、通訳者という「英語担当者」ではないユーザーが、頻繁に英語を使うことは、その場の調和を乱すことになり、集団内の英語使用競争意識をあおる可能性を認識していることを示している。通訳者にその場の「英語」を引き受けてもらうことで、競争心や暗黙のかけ引きなどの芽を摘み、その場の調和のとれた雰囲気を保つ、という役割を通訳者に与えている。さらには、ユーザー間のとりなしを期待するコメントもしている。「私は結構うるさいん(英語の解釈について)ですが、皆さんと和やかな輪に入った中で、伝えて下さる方がいいと私は思っていたし。」(i2)(括弧内の加筆は筆者)。「和やかな場」の維持を優先するような通訳者への期待を述べるものである。

#### 4.3.2 自己顕示ゆえの通訳からの独立

配慮のために通訳者に依存する姿の反対に位置するものとして、「自己顕示のための通訳からの独立」という姿も見出された。(i6)は、「英語で直接質問するのは、自己顕示じゃないですか?若干」と述べ、通訳者を介さず、他のユーザーの前で英語を使って直接講師に質問する自らの行為について、「自己顕示」と表現している。他者の中に存在して自己を表現する手段としての英語使用であり、通訳者からの独立するユーザーの姿の一例を示す。

### 5. 考察

以上、本事例を一つの社会状況と捉え、三つの側面に注目した。即ち、健康志向、英語学習志向という観点から「下位文化」としての側面、また、それを共有する人々の集まりで形成された「集団」としての側面、集団の中で「関係」が構築され通訳者に「役割」が付与されているという側面、である。これらの側面から、先に立てた問いの答えを探りながら、通訳サービスのユーザーの受容状況を考察した。ユーザーらの通訳の活用の仕方から、通訳に「依存」する姿と、通訳から「独立」する姿が見出され、そうしたユーザーの姿から、通訳者自身が意図する、しないに関わらず、通訳者が担っている多様な役割が浮かび上がった。

まず、依存する姿について、ユーザーは通訳者をリラックスを確保するために「楽」を提供するものとして活用し役割付けていた。ユーザーの健康志向により「リラックス」を優先し、「緊張を伴う英語」は通訳者に任せ、リラックスして使える英語の部分のみを自ら実践することで、英語使用を楽しみやすい経験のまま維持することを可能としていた。ここで通訳者は「不安解消」の役割を担い、学習意欲維持にも貢献しうる可能性もあるという示唆を得た。

また、言語習得中の学習者としては、通訳を「理解の補完」、「理解の検証」、そして「翻訳学習教材」として段階的に取り入れ、習得のプロセスに活用していた。通訳者の言語的役割とは通常、メッセージ内容をユーザーに理解可能にする、とされるが、本事例において、外国語習得中のユーザーが通訳者に依存していく様子を具体的にみると、それは階層的で「教材」としての役割を担う上、語学面で新たな発見を提供し学習意欲の刺激にもなることがわかった。

次に、独立する姿について、ユーザーが直接のコミュニケーションを望むときは、通訳者を「ワンクッション」と感じることになり、通訳者を介さず、直接英語で対峙する。また、訳出に違和

感を感じた時は、原発話と照らし合わせ、自ら解釈を行い消化していく姿が見られた。

英語の知識があり、さらに英語力向上を目指すユーザーは、単なる受動的な聞き手という枠にはおさまらない。通訳に頼り、内容理解を深めるのみならず、訳出を活用することで自らの言語学習も行い、さらには、通訳から「独立する」形で乗り越え、自ら原発話のメッセージを解釈する。また、通訳という「ワンクッション」を入れずに、自分で納得のいく形でメッセージを講師に伝えるために英語を使用し、直接コミュニケーションをとるに至る。

通訳から独立したユーザーからは、「英語を学ぶ者」という意識を離れ、「英語使用者」というアイデンティティを持つに至る姿が見える。宮原（2018: 22）は、英語学習者のアイデンティティ構築プロセスを検証する中で、「学習者自身が自分を英語学習者としてのアイデンティティではなく、「英語使用者」として捉えることにより、個々の英語学習に対する姿勢が変遷する」と報告している。英語を、学習対象として捉えることから、意思疎通のツールとして、使うもの、という捉え方に変わることで、自分の「英語使用者」としてのアイデンティティが構築され、英語学習の「理想自己像」が強化されると述べる。本事例のユーザーが、通訳を介したコミュニケーションの体験をきっかけとして、通訳を活用しつつも、自分なりに解釈するようになって、通訳を乗り越える形で「英語使用者」としての意識を高めていくのであれば、ユーザーの今後の学習動機の向上の一端を、通訳者の存在が担いうる可能性もあるといえる。

さらに、集団の一員として、周囲への「配慮」や異文化コミュニケーションの相手との「対峙回避」のため及び「場の調和」の維持のために、通訳者の存在を活用し、敢えて依存するという姿も見出された。先行研究で見た通り、「社会的要素の調整役」、「異文化のファシリテーター」として聞き手と話し手間の異文化の橋渡しをする、という通訳者の役割について言及する研究も多い。しかし本事例で明らかになった「調整役」というのは、聞き手と話し手との間の異文化の橋渡しではなく、むしろ、ユーザー集団の中の個々のユーザー同士の調整役である。岡田・安藤（2017: 21）は、成人の学習者において他者との関りが学習動機付けに与える効果を研究し、他者との関りでも、「同じような学習レベルで」あり、かつ「仲間意識がもてる」関りが学習動機付けに効果を与えると指摘している。ユーザーにとって、調和のとれた場で、他のユーザーたちと仲間意識をもつことが、学習意欲維持のためにも効果的であるならば、通訳者が「ユーザー間の調整役」という存在であることは、ユーザーの学習意欲の維持に貢献する要素であるといえる。また糸井（2005: 45）も、生涯学習としての英語学習について、特に高齢者を対象とした研究を報告しているが、海外旅行などで使える英語力の獲得を目指す高齢者もいる一方で、高齢になるほど「他者との交流」などが主な目的となる傾向が高まり、英語の上達をめざすことだけでなく、英語そのものを楽しみ、「他者と交流する場としての英語学習環境を提供することが望ましい」、と述べている。本事例のユーザーは糸井が高齢者と定義する 60 歳以上は 6 名中 5 名である。通訳者の訳出が、英語の聞き取りをサポートし、講座の理解を深める助けとなり、さらには、英語発話の競争を沈め、周囲との「和やかな場」に安心して身を置くことができる環境を提供できるのであれば、それも通訳者の担いうる役割の新たな一面とも言える。(i6)も、「皆さんと会えるのが楽しいですから。」と面接を締めくくっていた。

## 6. 結論

本調査は、英語の知識をもち、かつさらに習得に努めるユーザー達が通訳をどのように受け止め、活用しているかを調査し、通訳者が担うに至った役割を明らかにすることを目的とした。それにより、現在の多岐にわたる通訳現場で、通訳者が担いうる役割が想定以上に多面的であることに改めて目を向け、より幅のある現場でのパフォーマンスに少しでも寄与できたらという思いで実施した。

そのため、研究設問として、(1) ソース言語を部分的に理解し、その言語知識の維持・向上のための意欲を持ち、自ら学習に取り組むユーザーが、通訳をどのように位置づけ、具体的にどのように活用しているか、(2) (1)で見出されたユーザーの通訳の活用の在り方から、通訳者が担うに至った役割は何か、という問いを立てた。

(1)については、リラックスを求めるユーザーには疲れや不安の原因となる英語を取り除くために活用されていた。また語学力向上に取り組むユーザーとしての依存の形が、「理解の補完」「検証」「翻訳教材」と多層的であった。一方で、通訳に頼らず、独立して解釈する姿も見出され、「英語の学習者」から、「英語使用者」というアイデンティティを構築していることがうかがわれた。さらに、集団の一員として周囲に配慮するため、異文化の他者との個人としての対峙を避けるため、また、「場の調和」を維持するために通訳に依存する形も見られた。

問 (2)への答えとして、これらの依存、活用の在り方から、通訳者は、言語的サポートとしてユーザーの内容理解に貢献しているだけでなく、不安解消の役割と、学習教材としての役割を担い、ゆえに学習動機の維持や刺激に貢献していると言える。また、ユーザー集団においては、ユーザー間の調和維持にも活用され、ユーザー同士の調整役という役割を担うに至っていると言える。

通訳者には、まず言語面で忠実性が求められ、さらに通訳の場によっては、その存在の透明性や、「黒子」であるべきという期待もある。しかし、今回の事例のように、複数のユーザーが介し、交流や場のなごやかさも重視される場においては、むしろ「黒子」であるよりも、その存在を明確に認識してもらう必要もあるといえるのではないか。今回の一事例から浮かび上がった受容現象から考えると、コミュニケーションの現場では、通訳者として、その円滑さを実現する援助の在り方は多様で、ユーザー各人が、思いもよらない補助を求める場合もあると言える。いかなる場合でも、職業倫理に則し行動するべきではあるが、通訳者に求められる補助機能の多様性について通訳者自身が認識しておけば、通訳者とユーザーとの間に、何らかの齟齬がある場合、その原因について判断でき、何らかの対応をすることも可能となる。

## 7. 今後の課題

今回の調査では、本事例におけるユーザーによる通訳の活用の在り方と、通訳者が担いうる役割については明らかにし、その「多層的な言語的サポート」、「ユーザー間の調整役」となりうる事を示すことができた。しかし問題点として、質的調査としても面接調査の対象者数が限られていること、その語学レベルを示す客観的指標がないこと、英語による他の公民館講座の調査ができず、本事例と比較検討ができなかったこと、などにより一般化は不可能である。さら

に、面接調査を実施した筆者自身が通訳者として参与しており、ユーザーのコメントに遠慮があった可能性があり客観性に不十分さが残る。面接で得られたコメントの正確な理解と、その正当性を確認するためにも、通訳者として講座に参加した際の観察記録も参照したが、客観性の保証にはまだ不十分であるといえる。さらに、講師が英語母語者ではない点で、他の英語母語者の聞き手としてのユーザーの受容状況とは異なる結果となっている可能性もある。今後は、より多くの通訳事例に目を向け、種類の異なるユーザー集団と通訳者の関わりを調査するとともに、外国語習得を目指す者と通訳者との関係についてもさらに理解を深めたい。

.....

#### 【著者紹介】

森元亜紀子 (MORIMOTO Akiko) フリーランス翻訳、通訳。岡山情報ビジネス専門学校非常勤講師、岡山県立大学非常勤職員。キール大学大学院文学文化研究科修士。広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期修了。連絡先: am1206@go8.enjoy.ne.jp

.....

#### 【引用文献】

- Alexieva, B. (1997). A typology of interpreter-mediated events. In Pöchhacker, F & Shlesinger, M. (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 219-233). Oxford: Routledge.
- Anderson, R. (1976). Perspectives on the role of interpreter. In Pöchhacker, F & Shlesinger, M. (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 209-217). Oxford: Routledge.
- Ciordia, L. (2016). A context-based approach to community interpreting. Perceptions and expectations about professional practice in the Spanish context. *International Journal of Language, Translation and Intercultural Communication*, 5: 67-77.  
[Online] <http://dx.doi.org/10.12681/ijltic.10655> (2018年10月1日)
- Kurz, I. (1993). Conference interpretation: expectations of different user groups. In Pöchhacker, F & Shlesinger, M. (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 313-324). Oxford: Routledge.
- Kurz, I. (2001). Conference interpreting: quality in the ears of the user. *Meta*, 46(2): 394-409.  
[Online] <https://www.erudit.org/fr/revues/meta/2001-v46-n2-meta159/003364ar.pdf> (2018年10月3日)
- Lofland, John, & Lofland, L. (1995) *Analyzing social settings: a guide to qualitative observation and analysis* (3rd ed.). Belmont, CA: Wadsworth. ロフランド, J. & ロフランド, L. (進藤雄三・宝月誠訳) (1997) 『社会的状況の分析—質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣.
- Ng, B.C. (1992). End users' subjective reaction to the performance of student interpreters. *The Interpreters' Newsletter Special Issue 1*: 35-41. [Online]  
<https://www.openstarts.units.it/handle/10077/2173> (2018年10月9日)
- Pöchhacker, F. (2004). *Introducing interpreting studies*. New York: Taylor & Francis Group. 鳥飼玖美子監訳 (2008) 『通訳学入門』みすず書房

- Pöchhacker, F & Shlesinger, M. (Eds.), *The interpreting studies reader*. Oxford: Routledge.
- Ricoy, R.P. (2017). To interview or not to interview: a critical approach to assessing end-users' perceptions of the role of 21st century indigenous interpreters in Peru. *Translation & Interpreting* Vol. 9. No. 1: 36-50. [Online]  
<http://www.trans-int.org/index.php/transint/article/view/618> (2018年10月5日)
- Roy, C. (1993). The problem with definitions, descriptions, and the role metaphors of interpreters. In Pöchhacker, F & Shlesinger, M. (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 345-353). Oxford: Routledge.
- Simmel, G. (1950). The triad In Wolff, K. trans. *The Sociology Of Georg Simmel* [Online]  
<https://archive.org/details/sociologyofgeorg030082mbp/page/n5> (2018年11月20日)
- Takimoto, M. (2006). Interpreters' role perceptions in business dialogue interpreting situations. *Monash University Linguistics Papers* 2006 Vol. 5. No. 1: 47-57. [Online]  
[https://au-east.erc.monash.edu.au/fpfiles/8570935/monash\\_6638.pdf](https://au-east.erc.monash.edu.au/fpfiles/8570935/monash_6638.pdf)(2018年10月30日)
- Vuorikoski, A. Simultaneous interpreting as experienced by the audience. Krawutschke, W. (Ed.), *Connections*. Proceedings of the 36th Annual Conference of the American Translators Association, November 8-12. [Online]  
[https://www.academia.edu/3352578/Simultaneous\\_interpretation\\_User\\_experience\\_and\\_expectation](https://www.academia.edu/3352578/Simultaneous_interpretation_User_experience_and_expectation) (2018年11月20日)
- Wadensjö, C. (1993). The double role of a dialogue interpreter In Pöchhacker, F & Shlesinger, M. (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 355-370). Oxford: Routledge.
- Wadensjö, C. (1995). Dialogue interpreting and the distribution of responsibility. *Hermes, Journal of Linguistics* No. 14: 111-129.[Online]  
<https://pdfs.semanticscholar.org/b90a/e584afcd5b7a057a14c73f3aef0c18029c55.pdf#search=%27Cecilia+Wadensjo++Dialogue+interpreting+and%27> (2018年10月9日)
- 糸井江美 (2005) 「学力の衰えと直面する高齢英語学習者」『教育研究所紀要』14: 41-46. [Online]  
<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/wp/wp-content/uploads/2014/07/kiyo14/41.pdf> (2018年9月28日)
- 糸井江美 (2007) 「生涯学習として英語を学ぶ人たちのニーズ分析」『文教大学文学部紀要』21(1): 171-189. [Online] <http://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8210367> (2018年9月28日)
- 宮原万寿子 (2018) 「学習者のナラティブに見られる変遷「言語学習者」から「言語使用者」へ」『英語教育』2018年6月 Vol. 67. No. 3: 22-23.
- 水野真木子 (2011) 「日本におけるコミュニティ通訳の現状と課題」佐藤=ロスベアグ・ナナ 編『トランスレーションスタディーズ』(pp. 223-246). みすず書房
- 岡田真作、安藤孝敏 (2017) 「成人の学習者において他者との関りが学習動機づけに与える効果—街にある語学教室の事例—」『技術マネジメント研究』第16号: 17-23. [Online]  
[https://ynu.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=8005&item\\_](https://ynu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=8005&item_)

no=1&attribute\_id=20&file\_no=1 (2018年7月30日)

関口靖広 (2013) 『教育研究のための質的研究法講座』 北大路書房

新崎隆子 (2017) 「「聞き手」の視点から見た同時通訳と逐次通訳」 『通訳翻訳研究』17号: 167-187.

高橋絹子・木村護郎クリストフ (2017) 「だれがいつどこで何のために通訳を使うのかー 日英ビジネス通訳の事例からー」 『通訳翻訳研究への招待 17』(電子ジャーナル)第17号: 1-19. [Online] [http://honyakukenkkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol17/No\\_17-001-Takahashi-Kimura.pdf](http://honyakukenkkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol17/No_17-001-Takahashi-Kimura.pdf) (2018年9月30日)

高橋絹子・木村護郎クリストフ (2018) 「英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか?ー 日英ビジネス通訳の事例からー」 『通訳翻訳研究への招待 19』(電子ジャーナル)第19号: 91-108. [Online] [http://honyakukenkkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol19/No\\_19-005-Takahashi\\_Kimura.pdf](http://honyakukenkkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol19/No_19-005-Takahashi_Kimura.pdf) (2018年9月30日)

#### 【巻末資料】面接調査における質問事項

##### 1. 受講動機と当初の期待

- 1.1 なぜ、英語による「リラクゼーション」を学ぶクラスに参加しようと思ったか。
- 1.2 受講によって、健康維持の知識と、英語力の両方の向上を期待していたか。

##### 2. 通訳に求めること

- 2.1 通訳が役に立つと感じる時はあるか。
- 2.2 訳出の忠実性を求める点はどこか。
- 2.3 わかりやすい日本語に調整してほしいときはあるか。
- 2.4 講師が日本人でないために、言語面以外で困ったことはあるか。
- 2.5 もしあれば、通訳に求めることは何か。

##### 3. 自分の英語学習と受講の関係

- 3.1 講師の英語を聞く姿勢 (英語に集中するか、英語には意識を向けず、その後の逐次訳を待つか)
- 3.2 自分が話す際の英語と日本語の使い分け(英語で話そうとする時と日本語で話し通訳に頼る時)

